

#### 1 はじめに

江別市は、石狩平野のほぼ中央部に位置し、総面積は187.57km<sup>2</sup>を有しており、地形は南端部の標高93.0mが最高で、北東部の標高2.5mの湿地帯が最低であり、全般的に平坦な地形を形成しています。日本三大河川の一つである「石狩川」が市の北東部から北西部へと市域を貫流し、各支流河川と合流しています。また、南西部には札幌市と北広島市にまたがり、市域の約10%にあたる道立自然公園野幌森林公園が広がっており、四季折々の変化に富んだ豊かな自然を楽しむことができます。

開拓の歴史としては、明治11年に「江別村」が誕生、その後、各地から屯田兵が入地し、計画的な開拓がすすめられ大正5年に「江別町」、昭和29年に市制が施行され「江別市」が誕生し、現在に至っております。



えべつやきもの市

農業では、「麦の里えべつ」として、石狩地方でも有数の小麦の産地であります。なかでも収穫量が少なく「幻の小麦」と言われている「ハルユタカ」については、初冬蒔き栽培とすることで安定した収穫・品質を達成することに成功し、全道生産量の大半が江別産となっております。

産業としては、古くからレンガの産地として知られ、120年以上もの窯業の歴史は市民の生活を支えつつ、文化的にも大きな影響を与えてきました。また、毎年7月には道内の陶芸家や金属・ガラス工芸作家を中心に、「やきもの」にこだわった飲食店など約350店が出店する道内有数のイベント「えべつやきもの市」が開催されています。

#### 2 江別市消防団の紹介

当市の消防団は、明治31年（1898）に公設消防組が設置され、昭和14年（1939）には消防団を発足、昭和22年（1947）に消防団に改組されております。現在は、1本部、8分団の条例定数200名で組織されており、本部には団長1名、副団長3名、女性消防団員16名（部長1名、班長3名、団員12名）で、各分団には分団長8名、副分団長8名、部長8名、班長40名及び団員99名の合計183名で構成されています。

消防団には、ポンプ車6台、小型ポンプ付積載車2台及び小型動力ポンプ8台を配備しています。主な活動としては、年1回の統一訓練を行うほか、日ごろから防災活動や災害に備えるために分団ごとに訓練を行い、春、秋、歳末には火災予防広報を行っております。近年は、職員と共同で希望者宅での「住宅用火災警報器設置支援」や万が一火災等の災害が発生場合、避難誘導など連携が必要と思われる地域内の小規模福祉施設と「顔の見える関係」を作るなどの取り組みを行っております。また、女性消防団員を対象に応急手当普及員を養成し、市民や事業所における応急手当普及活動や、火災予防運動期間中には一人暮らし高齢者宅訪問を行う

など、市民の安心と安全を守るため重要な役割を果たしています。

### 3 安全装備品等助成事業の活用

先にも紹介しましたが、江別市は石狩川と、そこへそそぐ各種河川が市内を流れており、その開拓の歴史には水害を抜きには語れません。過去には何度も水害に見舞われており、昨年には突然のゲリラ豪雨による局地的被害も発生しております。

当市としても、このような水防活動において



救命胴衣 TK-18A



ゲリラ豪雨による局地的被害

消防職員は元より消防団員の活躍が必要となりますが、その活動の際に安全を確保するためにも救命胴衣の整備は重要なものではあると考えておりました。しかし、全団員分を整備するには当市では財政難のため苦慮しておりました。このような中、消防基金による研修会にて、安全整備品装備品等助成事業を知り、その助成対象の中に救命胴衣があったので安全な水防活動のためにこの事業を活用したいと考え助成申請

に至っております。当事業の活用により救命胴衣を全団員分 187 着整備しております。

今回整備した救命胴衣ですが、小型船舶安全規則に適合した「TK-18A」であり、着装時にも消防団員としての活動であることが分かるよう背面に「江別消防」の文字を入れております。整備後、実際に着装するような水防活動はありませんが、今後実災害は元より訓練等において着装することにより、安全な活動が確保

されるのではないかと考えています。

#### 4 今後の安全への取り組みについて

今後は安全装備品の充実を図るハード面だけでなく、ソフト面である消防団員の安全管理意識の高揚を図ることが必要であると思います。全国の消防団員が同じような課題を持っていると思いますが、本市消防団は高齢化が課題となっております。災害現場や訓練において公務

災害を未然に防ぐために、毎年消防団員研修会を企画し消防基金の消防団員公務災害防止研修事業である安全セミナー、S-KY T研修、健康セミナーなどを受講しておりますが、引き続き実施することにより、各自が更なる安全意識の高揚を図り行動することで、事故のない消防団を目指していきたいと考えております。



救命胴衣 187着